

虎★ハリマオ

〈祖母〉キタムラ・ミツエに捧げる―

登場人物

原 光江

原 双樹

デン助

貸本屋のおタツ

ミンプク(国民服)

檻の中の虎

田宮

神竜蛇の介

片眼

紅屋

女土方たち

男土方たち

桂

サラマンダーゲリラの乙女たち

双樹の父

双樹の母

第一幕

序景

桜が静かに吹雪いている。その花卉のあい間から空を見つめて立っている少年がいる。学生帽を目深にかぶったその少年は、ゆっくりと空を指さした。……名を原双樹。

双樹 ちがうんだよお祖母ちゃん。本当に鳥が飛んでたんだ。僕の空想なんかじゃあるもんか。あれは何という名の鳥だろう。絵に描いたような鳥だった。

その鳥のように双樹踊ってみる。

双樹 きつとそうだ。始祖鳥。ジュラ紀後期。体長五〇センチ、雑食。鳥の遠い祖先でありながらはばたくことができず、木から木へ滑空するだけであった。ヒューッ。

と、黒いシュミーズの若い女性が、時を超えてきたかのごとく現われる。

その声 スミロドン。虎の祖。第三紀後期から第四紀。体高一メートル、肉食。上あごに三〇センチもある鋭い牙を持ち草食動物をおそって食べた。

シュミーズの女、名を原光江。双樹の祖母にあたる。

双樹 お祖母ちゃん。

光江 双樹、また空想かい。

双樹 いんや。ちよつと寒かったから踊ってたんだ。こつやつて踊つてると何処へでも行けるんだ。鳥みたいに。

双樹、踊ってみる。……舞い散る桜。

光江 (呪文のようにつぶやく) ハリマオ。……

光江、股間から白い突起物をぬく。それは……

双樹 何や、それ。お祖母ちゃん？

光江 これはね。これは、骨さ。私と双樹をつなぐ骨さ。

双樹 違うよお祖母ちゃん。それは牙だ。虎の牙だ。(ふぎけて吼える) ガワーツ。
ハハハハ。……

暗転

景一 時の砧

貸本屋がある横丁。開店休業のソフトクリーム屋も見える。その店から顔を出したのは双樹とデン助。

双樹 デン。

デン助 うん。

双樹 神州幻童士の四月号見たか。

デン助 いんや。

双樹 三月号の別冊は。

デン助 見てない。

双樹 遅れてるぞ、お前は。

デン助 二月号見たよ。

双樹 遅れてる。

貸本屋にはシンソーローの婆さんがいる。立ち読みをすると、鯨尺で机をたたく。

双樹 四月号が出る。幻童士がまむし谷へ来る。姫が危ないから。

デン助 俺、快傑ハリマオが読みたい。

双樹 あの話はよく分からん。

デン助 色めがねがいい。

双樹 忍術を使わんからおもしろくない。

店番の婆さんが歯を指でみがき始めた。双樹とデン助けスツと店に入る。

婆 立ち読みはいかんよ。

双樹 五円ある。

婆 一冊しかいかん。

双樹 神州幻童士の載ってる本は？

婆 冒険ブックは風呂屋のサンちゃんもってったよ。

デン助 ハリマオは、

婆 純情クラブは明日。

双樹 読む本がない。

姿 日ノ丸マガジンは？

双樹 仕方ない。それ読む。

デン助 俺も。

双樹 おばさん。二人で読んでも五円か？

婆 おマケしといてやる。そやけど、あんたら、ちゃんと宿題はしてるんやろうね。

デン助 うん。

双樹 僕はやってへん。ここでマン画読むのが宿題やからね。学校の宿題は退屈でアホラしいて、やってられへんもん。

デン助 うん、双樹は漢字が読めるもんな。この前は四年生の算数の宿題みてやったもんな。

婆 ほな、ワシが問題出すで答えてみい。

デン助 ああ。ええわなあ、双ちゃん。

婆 日本で一番エライ人は誰か。

デン助 天皇へいかや。なあ、双ちゃん。

双樹 ちやうぞアホ。

婆 ほな、誰や。

双樹 うっとこのお祖母ちゃんが一番エライんや。

デン助 何でや。

双樹 うっとここでは、明治天皇の上の段にお祖母ちゃんのおジイちゃんの写真がござったるもん。そのおジイちゃんですら、お祖母ちゃんにはペコペコしよる。

婆 フン。芸者のどこがえらいもんか。(と、小声で)

双樹 え？

婆 なんでもあらへん。読んだら早よ帰れ。

と、奥から声がする。この店の主人。バアさんの亭主らしい。

声 タツう！ タツう！

婆 うるさい！

声 タツう！

婆 うるさい！

声の主が出て来る。国民服を着た男だ。

国民服 クツ。めし食わせい。

婆 うるさい。(と、口をゆすいでいた水を吐く)

国民服 店番はする。おかず買いに行け。

婆さんだまって出て行く。

国民服 コロッケ買うのはショウチせんぞ。かしわ買ってこい。

国民服の男。この町内ではミンプクさんと呼ばれている。ブツブツ言いながら、エロ雑誌を読み始める。

双樹 ミンプクさん。本、読まして。

ミンプク おう。ええぞ読め。クソババア。わしはな、戦争が終わっても戦争しとったんやで、知ってるやろ。

双樹・デン助 うん。

ミンプク 今の世の中は戦さがないから、女がいばる。昔は、かしわ食ったんやで。何でコロッケ食えるか。

デン助 (そんな話は聞いていない) 竜巻小天狗、死んだんやろか。

双樹 君、標準語で話したまえ。今、博士は悪魔大王と、科学対魔法の決戦なんだ。

デン助 小天狗死なんもんな。

双樹 彼は死んだふりをするだけだよ。それだけさ。

ミンプク 佐渡オケサやで。

双樹 正義の味方は、皆、誰でも死んだふりをする。

デン助 小天狗はいつも死なない。

双樹 見ろ！(と自分が見ていた本を見せる) 石灰岩の化物に追いつめられた敷島博士は怪物に水をかけた。

デン助 それは何故。

双樹 石灰岩は水で溶ける。

デン助 うん。

双樹 でも、すぐには溶けない。だからこの水は時間水だ。

デン助 ミカン水か。

双樹 ちがう。時間水だ。H₂Oをタイムマシンにかけて、一滴の水に五万年の時間をもたせるのだ。

ミンプク そうや。南極や。一滴の水にも五分の魂や。

双樹 石灰岩の化物が溶けていく。

デン助 石灰岩て何や。セッケンの元か。

双樹 うん。石ケンにもチヨット入ってる。

デン助 双樹はカシコイな。

双樹 うん。僕は小学生なのに漢字が読める。ミンプクのオッチャン、今。何時。

ミンプク そうね、だいたいね、五時。

双樹 よし、僕は帰る。

デン助 何で？

双樹 風呂を沸かす。

デン助 ああ。

双樹 おまえも帰れ。

デン助 まだ帰らん。

双樹 この店は、五時を過ぎると、裏に虎を飼う。

デン助 ウソや。

双樹 ちがう。

ミンプク 虎、見せたらか。

デン助 うそや。

双樹 もうじき吠える。

耳をすます三人。ゴオーツと地下から金属がセメントにスレるような音がある。

デン助 竜巻小天狗が来てくれるわい。(ワナワナ)

双樹 僕は帰る。遅くなると虎に喰われる。

双樹、外に出る。デン助も後に続く。

双樹 デンちゃん、まだ下駄はいてるか。

デン助 うん。(と、足を見せる)

双樹 (足をあげて) 仲間や靴なんかはいたらあかん。

デン うん。

双樹、去る。

デン助 でも、今度の遠足のとき、買ってもらう。(去る)

ミンプク (本を整理し始める) 虎や虎や……。試験管の割れる音がする。手術台の上で歴史がひとつ終わる。シャーレの中にそそいでいた月光がメスを照らす。銀の反射の中に影絵の虎が吠える。そうだ、おまえは影だから恐しい。

本棚がパツクリと二つに開いて店の奥が見える。檻の中に男の影が見える。

影 そうだおまえは影だから恐しい

それは少年がおまえの子孫
が

記憶していない時の砧

試験管の割れる音がして

手術台の上で歴史がひとつ終わると

銃声のする病院に夜が来る

目的もなく傷ついた若者は今日

地下鉄の工事現場で働いていた

まるで白亜紀のジャングルのように

そこは草食の兵士にとって

は

生き残るために木のツチをふるう石の台であった

その砧の音が

ツルハシの音のように聞こえると

時のこまがひとつ進み

土中から鉄の線路が見えてくる

それはずっと過去に続いているので

子供たちは

父と母を飛びこえて

祖母の代まで行かねばならぬ

そこに虎のいる病院があるが

少年には恐しくて近よれぬ影に見える

好奇心が彼を始祖鳥にする

地下鉄工事の現場が現われて、昔の人々が苦役している。女土方もいる。

そのうちのひとりには原光江だ。片眼の親方が来てムチをふるう。

片眼 掘れ、掘れ、うんと掘れ。掘ると鉄の線路がのぞいて出る。しかしその前に

骨が出るだろう。それは、イヴになりそこねたアダムの肋骨だと思え。つまり用な

しの「たかが骨」だ。

男土方 1 骨だ！

皆、そつちを見る。

片眼 それはおまえの兄貴の骨だ。ここは先祖代々の骨の墓場だからな。しかし、

ここをもうすぐ文明が走る。地下に列車が走るのだ。

女土方 1 骨だ！

片眼 それはおまえの母親の骨だ。

女土方 1 おっ母さん。(骨を抱く)

片眼 (1をムチ打つ) 怠けるなア！

さんざん女土方1をムチ打って片眼の親方は笑いながら去る。女土方は倒れ伏す。それをかかえ起こして光江。

光江　すっかりおし。皆、がんばるんだ。働いているフリをして怠けるんだ。ここに列車を走らせたなら、我らの負けだ。ハリマオが来てくれる。きつと来てくれる。我らを助けにやって来る。だから、がんばろう。

女土方1　お光さん。

皆、うなづく。

光江　ハリマオは日本人だ。だから約束は守ってくれる。私はハリマオを見た。馬に乗ってかけていくのを見た。私は旗をふった。私の前をハリマオが走った。

皆、うなづく。夢を見るような光江の眼《まなざし》。

光江　あの人は不死身だ。マラリアにかかって死んだってのはウソだ。あの人は生きてる。

男土方2　お光さん。俺はツルハシを横にして土にぶつける。

男土方1　俺はモッコに穴を開けてかつぐ。

女土方2　私は倒れるふりをする。ムチなんか痛くない。

光江　よし、皆、がんばろう。がんばって怠けよう。矛盾の労働だ。

サイレンが鳴る。

花束を持った青年が現われる。現われぎわに男の土方をひとり銃で殺す。ライフルを花束の影にかくしていたのだ。花束を光江に投げる。

青年　受け取って下さい光江さん。愛しています。愛ゆえの殺人です。片手にライフル片手に花束。愛すればこそそのダンディズムです。恋は、眼には見えないけれど、こういうスタイルをしているものだとは思いませんか。光江さん、私は貴女を愛しているからこそ、貴女に花束を投げ、人までも殺めたのです。結婚しましょう。歴史上、かつてこのようなトートツな愛の告白が、プロポーズがあったでしょうか。さあ、イエスカノーか光江さん、貴女の返事次第では、また人がひとり血を流して倒れますぞなもし。

女土方1　キチガイー

青年　うるさい！　動物はしゃべるな。私は人間とお話したい。光江っちゃん。今日で十日間私、通いづめです。今日こそ色よい御返事が頂きたい。

光江　（花束を地面にたたきつける）

青年 (女土方1を撃つ)

光江 何てことを!

青年 愛ゆえに。

光江 血も涙もないのか。

青年 貴女こそ。

光江 何故私みたいな女につきまとう。

青年 ジャジャ馬が好きなのです。いや、貴女はメスの虎だ。調教のしがいがある。私のふるうムチの下に、尻の穴までなめさせたい。私はそういう男なのです。さあ御返事を。

光江 誰がお前のとこなんか。

青年 (ライフルを男土方に向けて) 同胞がまたひとり、土にかえりますよ。いいのですか。

男土方2 くそおつ、撃て! 撃ちやがれ!

青年 キャンキャン吠えるな犬! 俺はお前のような犬っころに興味はないのだ。ホホホ。しかし、死にたいのなら殺してやろう。ここに居れば、やがては死んでしまうのだからな。(赤い唇がゆがんで笑う) いつか正義の味方が現われて、ここから救い出してくれるなどタワケた夢はステなさいよ。ホホホ……。 (銃口を土方2に向けて)

光江 待った!

青年 プロポーズを受けてくれるのか光江っちゃん。

光江 考える時間がほしい。

青年 よろしい。どれくらいかね。

光江 五万年。

青年 君は私の子孫と結婚するつもりなのか。

光江 それでは。

青年 明日までだ。式の準備をして待っている。ホホホ、ではまた。サイレンがうなったら出て来るよ。ホホホ、お楽しみにね。

青年 ひっこむ。サイレンが鳴る。再た青年出て来る。ひっこい、こやつのは神竜蛇の介。

神竜 私はひっこい男なのだ。だから蛇の介と名乗っている。諸君、ラッキーニユースがある。ハリマオが死んだことが、我軍情報部によって確認された。

土方たち、口々にウソだと連発する。

神竜 だまれ虫けら。私にとっても彼の死は非常に残念なことではある。私は心秘かに彼と対決すべき日の来ることを願っていた。彼と一対一の勝負がしたかった。

神竜蛇の介、人生の残念だ。

光江 ハリマオは死んじやいないよ。

神竜 ほほう、さすが私の未来の妻だ。気はしっかり強い。しかし光江さん、事実と願望をマゼっこぜにしてはいけない。

光江 ウソじゃないさ。ごらんこれを。(手に一枚のカードがある)

神竜 それは！！

女土方2 ハリマオの予告カードだ。

光江 このカードは今日ここに投げこまれた。そしてこのカードこそ彼の生きている証し。このカードの投げこまれるところ、ハリマオは現われる。マラリアで死んだというのは敵のスパイが流したデマなんだ。

ライフルの銃声。カードが光江の手を離れて宙を舞う。神竜のライフルが煙を吐いている。

神竜 御返事は明日の夜だよ。光江さん。！おい、片眼！

片眼の親方が出てくる。

片眼 へい！

神竜 死体をかたづけろ。

片眼 へい。

神竜 あっちの女の方はまだ息があるはずだ。死なない程度に撃ってある。私の部屋の床に転がしておけ。今夜ゆっくりと殺してやる。ホホホ。(去る)

片眼 穴を掘れ！ この犬っころを埋める穴だ。

女土方2と男土方2、穴を掘り始める。

片眼 三ヶ月もすれば骨になる。「たかが骨」にな。

片眼は女土方1を背負って去る。光江、撃ち飛ばされたカードを今一度手にする。

男土方2 こいつとは黄の十三番戦線で一緒だった。義勇軍くずれのゲリラだった。名も知らぬ友人だった。流れのサンパチがこいつの通り名だった。俺はシジマの十八番。反乱軍のcockクをしていた。

女土方2 裏の月。それが私の通り名です。青の四番戦線で戦闘中、捕虜になりました。

光江 (カードを見つめたまま) 義勇軍野戦病院所属。看護婦、光江。

男土方2 これて葬儀のアイサツは済んだ。勇士流れのサンパチ、我らが胸に眠れ。

男土方2、ハーモニカを吹く。

音楽。

光江、カードを抱きしめる。

光江 ハリマオ……。

小暗転。

双樹がハーモニカを吹いている。デン助が来る。

デン助 双樹探偵。

双樹 (ハーモニカをポケットに入れる) 助手のデン君か。ローソクは持って来たか。

デン助 持って来た。

双樹 よし。では出発しよう。

マッチの火に浮かぶ二人。

デン助 火遊びしたら、あかんよ双ちゃん。

双樹 猿が火遊びをしなかったら、人類の誕生はなかった。ローソクを。

デン助 はい。

双樹 少年探偵団の生みの親、江戸川乱歩先生はローソクの炎の下で小説を書いていらっしやる。

デン助 へえ!。

双樹 ローソクは世界をお化けにする。

デン助 うん、ほんまや。

双樹 デン君、足下に気をつけて、ここはもう地下道だ。

デン助 うん。地下道や。でも双ちゃん何で、さっきは急に帰ろ言ったんや。

双樹 それは風呂を沸かす為ではない。ここを探検する為だ。家に帰ったらまだ四時であったのだ。

デン助 なあ、双ちゃん、帰れんようになったらどうしよう。

双樹 心配するな、ちゃんと目印が置いてある。

デン助 ほんまか。双ちゃんカシコやなあ。

双樹 デン助君、標準語をつかいたまえ。それからローソクの火に注意だ。

デン助 火事になるからけ。

双樹 いんや違う。一酸化炭素に注意するためだ。

デン助 へえ!!

双樹 冒険ブックで少年探偵王がやったのを君は読まなかったのか。
デン助 知らなかった。

双樹 同じアイデアで怪人ゴーストの山田刑事が敵のアジトへ潜入した。
デン助 へえ！。カンソタカ……何だっけ。

双樹 無知は知恵と勇気の少年の後について来ればいい。

デン助 うん。ほいでも貸本屋の裏に地下道があるって、ようわかったな。

双樹 前々から、あのミンプクさんが怪しいと思ってたのだ。だから、立ち読みのフリをしながら探偵をしていたのさ。

デン助 ミンプクさんは怪しいのかい。

双樹 怪しい。あの人が店の奥から出てくる時、いつも服に赤土がついている。

デン助 へえ！ 赤土がついてると怪しいのけ。

双樹 漢字の読めんアホはだまりなさい。

デン助 うん。そいでも双ちゃん、仲良うしてや。

双樹 よし。おや、ローソクの炎がゆれる。

デン助 タンサンカンソヤるか。

双樹 違う。風だ。どこかに出口がある証拠だ。風はどうやら向こうから吹いてくる。

と、突然後ろから声。

声 誰だ！ 誰かいるのかそこに。

デン助 誰もいません。

双樹 バカ。かくれる。

ミンプクがローソクを手に入ってくる。ジロジロッと辺りを見回して去る。

双樹 ミンプクさんだ。

デン助 帰ってったな。

双樹 うん。うーむ。まるでNHK少年ドラマみたいになってきた。

デン助 うん。

双樹 いそいで風に向かっていこう。こっちだ。

誰もいない地下鉄工事現場が現われる。

デン助 うわあ、すごい広い。

双樹 静かにしろ。もしかするとここは怪人ゴースト博士のアジトかも知れない。

ああ、何という運命の心地よさ。

デン助 ねえ、双ちゃん。もう帰ろ！

双樹 心配するなデン助くん。僕たちには強い味方がいる。

デン助 味方。ハリマオかい。

双樹 ちがう。そうやない。それは黄金キッドだ。子供画報の快人黄金キッドだ。標準語を使う正義の味方だ。

デン助 うん。ほいでも、ここはどこやろ。

双樹 よし、もっと奥へ行ってみよう。

デン助 うん。黄金キッドが来てくれるね。

双樹 うん。

と、あの檻が現われる。男の影がある。少年たちはそれに気づかず横切つて消える。

影 私は神がいると信じている

神がいなければ起こりえない

と思われる事件が

私のまわりに二割ある

神の打率はだから二割

来年はトレードだ

銃声、あの女土方が血だらけで現われる。どこに寝ていたのか、光江と女土方、男土方がかけ寄る。

光江 どうした。

女土方―倒れる。

男土方 おい、しっかりしろ…

女土方2 しっかり。

男土方 ……駄目だ……。

光江 蛇のところからここまで逃げて来たんだね。

女土方2 舌を嚙んでるよ。

光江 私のせいだ。

男土方 お光さん。そんなことはない。

光江 いんや、私が悪い。私があつた男の言うことを聞いて素直にプロポーズを受けていたら……。

女土方 悪いのはあんたじゃない。

光江 あいつの尻の穴をナメてやる勇気があれば……。

男土方 うわさでは、あの男はクソをした後の尻をふかないという。

光江 オエッ。

女土方 ハリマオは、ハリマオは何をしているんだ。ゲリラ部隊は何処にいるんだ。
男土方 落ち着け。ハリマオだって並の人間だ。しかも十六もある戦線で戦闘はおこなわれているんだ。解放軍は絶対的に少数だ。青の戦線で苦戦を強いられていると聞いている。こんな辺境にはなかなかやって来られない。

女土方 でも、カードが届いたじゃないか。

光江 ……あれは……私が作った。

男土方 光江さん……。

光江 捕えられた人々は、あるものはオリンピックの土木工事に、あるものは地下鉄の強制労働に従事させられている。彼らの頼みのツナはハリマオが来てくれるという、ささやかな望みなんだ。我らもそうだ。

女土方 ハリマオは来ないのね。

男土方 死んだってのは本当か。

光江 死ぬもんかあの人が。

と、神竜の声。

神竜 死んだよ。第三ダム破壊工作作戦中、マラリアに感染、急拠入院せしが高熱のため死亡。その女も死んだらしいな。埋めてやれ、ホッホッホ。
男土方 おのれ！（と、ツルハシをふりかざす）

神竜、男土方を撃つ。

神竜 手間がはぶけていいねえ。墓穴がひとつですむ。

光江 神竜！

神竜 光江さん、答は明日だよ。

神竜、去ろうとすると銃声。

片眼が走り出て来る。

神竜 どうした。

片眼 ゲリラです。横穴を掘られてそこから。友軍が交戦中ですが、早く。

神竜 早くこの私に逃げると言うのか。敵の隊長は誰だ。

片眼 それが、ウワッ！

と、銃弾が片眼をつらぬく。ハリマオの姿がある。

ハリマオ 隊長は私だ。

光江・女土方 ハリマオ！

神竜 ハリマオ！

ハリマオ 神竜蛇の介さんだね。友人たちは頂いていく。

神竜、ハリマオにライフルを向ける。

ハリマオ 無駄なことはよせ。友軍の照準は君の頭と心臓にある。

あの横穴に国民服の影が二つある。ひとりは男。ひとりは女。

女 光江さん！

光江 あんたは。

女 通り名、金星の嵐。野戦病院の私です。

と、神竜のライフルがハリマオを撃つ。神竜消える。ハリマオは地に伏せる。金星の嵐とミンプクが神竜を追おうとする。

ハリマオ 待て。カスリ傷だ。深追いするな。友人たちをつれて勇退せよ。

勇退する。静かになる。双樹とデン助が出て来る。

デン助 どうしたんや。急に帰ろう言うて。

双樹 五時なんだ。お風呂を沸かさなくっちゃ。

デン助 (檻を指さして) 双ちゃん、あれ何やる。

双樹 うん。これは未確認埋没物体かも知れん。

と、檻の中に男が現われる。デン助、逃げる。

双樹 何者だ！

男 ハリマオ。檻の中の虎だ。

双樹 ウソだ。

男 ウソはお前の頭の中だよ。双樹ここから俺を出してくれ。

双樹 何故だ。何故、僕の名を。

男 俺を埋めたのはお前じゃないか。

双樹 え！

男 ハハハ。……ずっと遠い未来。お前は虎を一匹檻に入れて、貸本屋の地中に深く埋めるんだよ。やがて、過去のお前に出会わせる為にね。ハハハ。

双樹 何のことか分からん！

男 虚構の時間なんだ。双樹くん。さあ、俺を出してくれ。そして、遠足に行こう。昔々へ遠足に。

暗転。

景二 学生帽の中の宇宙

双樹とその両親が墓参している。両親は狐のお面をつけている。

双樹 父さん、僕、遺書を書くよ。

母 何を言うんだろうこの子は。

双樹 いつかきつとお祖母ちゃんの遺書を書くよ。

母 あなたはこれからどうされるの？

父 近所のパチンコ屋に行く。

双樹だけ残して暗転。パチンコ屋のチンチャラが聞こえる。床に落ちているらしい玉をひろう双樹。

双樹 お父上！ これだけひろって参りました。（父の口まねで）おうそうか、よし十円あげよう。はい。ありがとうございました。

走る双樹。貸本屋にかけこむ

双樹 おバさん！ 神州幻童士の新しいの入ってる？

タツ デン助が借りていきよったぞ。

双樹 えっ。ちくしょうあのデン助め。

タツ 今日は学校は休みかね。

双樹 今日はお祖母さん死んだから葬式やもの。学校行かんかてええんや。

タツ それなら、もっと大人しうせんかいね。

双樹 十円で二冊読ませてや。

ドロボーという声がある。赤いジューバンの男が走って来る。貸本屋の本をつかんで逃げる。

タツ こらっ！ 待てッ！（追っ）

双樹も表へ出るがスグに店にひっこむ。

双樹 今のうちに無料読みじゃーっ。

赤いジュバンの男がもどってくる。本屋の中に入る。懐からパンを出してムシヤムシヤ食う。

紅屋 紅屋言うねん。ぼん、パン食うか。美味いで。

双樹 いりません。

紅屋 遠慮せんときいな。まだいっぱいあるで。(ゴソツとパンを出す) ニこのおババな、川へ突き落としてやったわ。しばらく帰って来んよ。アハハハ……わし紅屋言うねん。ぼんは何ちゆうねん。

双樹 原双樹。

紅屋 原、言うたらお光さんとこけ。

双樹 はい。

紅屋 お光さん元気が。

双樹 ゆんべ……いえ、昨夜死にました。

紅屋 死んだ。あ、そうかね。ふーん。病気でかね。

双樹 はい。

紅屋 そうか。

双樹 おじさんはどうしてお祖母さんのことを知ってるのですか。

紅屋 黒いシュミーズのええ女やったが。

と、ミンプクが帰って来る。紅屋と視線を合わせる。

紅屋 神州幻童士あるかね。

ミンプク 最新号が奥にある。

紅屋 二冊もらおう。どうです、パンでも。

ミンプク・紅屋、相寄って何やらヒソヒソ。

紅屋 ボソボソ。

ミンプク えっ。

紅屋 ボソボソ。

ミンプク えっ、えっ。

と、タツ婆さんがビシヨ濡れで帰って来る。

タツ あんたア！ その男つかまえてんかあつ。

紅屋 おばん、元気で。(走り去る)

タツ あんた、何してんねん、早よ早よ。
ミンプク それはどんな理由でか。
タツ アホかあんたは。わしのこの格好見りや分かるやろが。
ミンプク お前は何か濡れている。
タツ あの男、うちから本を盗んで、わしを川へ突き落としよったんや。
ミンプク お前を盗んでいってほしかった。
タツ 何やて！

ミンプク逃げる。追うタツ婆さん。

双樹 さっきの二人の会話は暗号だな。神州幻童士はデン助が持つてるハズだからな。(と、学生帽を顔にかぶせて) ああ、星が見える。こうやって眼の上に帽子を置くと急に夜になって星が見える。学生帽の中の宇宙だ。もし泣きそうになったらこうやって星を見よう。何をしているんだいと聞かれたら、星を見ているんだと答えよう。マイ・プラネタリウム。今夜は葬式。……

星が降って来る。

♪その町の葬式は夜

とばりからシジマまで

裸電球を点す

すると人々の影は人々を離れて

大きくゆれ

巨人の国が現われる

巨人の笑う声に死者はふと眼をさまし

もう悲しむことの無くなった瞳で

空を見る

その人のためだけに星が光る

マイ・プラネタリウム

今夜は葬式

暗転。

景三 炎の種子

野戦病院の医局らしい。テントがはねあがって覗き見える。隣室には粗末なベッドがある。

裸電球の下に事務机が一つ。ハリマオが入って来てターバンを取り、サン

グラスをはずし、白衣を身につける。いつのまにか黒いシュミーズを身につけた光江がそれを見ている。裸電球がチカチカまばたいて消える。ローソクを点す白衣の男。田宮外科医師。ニセのハリマオ。

光江 田宮先生。

田宮 光江さん。寝てなくてもいいのですか。

光江 (田宮を指さして) ハリマオ？

田宮 見てたんですか。

光江 ええ。

田宮 (首を横にふる) 光江さん、貴女が先だつての戦いで敵の虜となつた翌日、この野戦病院に担ぎこまれて来た連中がありました。ハリマオを始めとする特別ゲリラ隊の連中です。彼等は殆どがマリアに冒されておりました。中でもハリマオは手の施しようもなくひどく、おまけに我々もまた、前夜の戦いで医師や看護婦を多く失い、特効薬もなく、一人倒れ二人倒れ、熱にうなされ悪夢に犯され、また一人倒れ二人倒れ、ハリマオも……まさに、虎のごとく雄々しく立ちあがると空をつかんで、床に倒れ伏したのです。

テントが二つに裂け、あの檻が見える。燭台が幾つもゆれ始める。

田宮 光江さん、ハリマオは死んだのです。貴女が愛し、我々が愛した虎は死んだ。僕は、僕は彼を救えなかった。僕の未熟な医学の術では彼を救えなかった。

光江 田宮さん。

田宮 このターバン、このサングラス、そして虎のバックルのついたガンベルト。愛用のコルト。そしてこの黒い手帳。

光江 黒い手帳？(手帳を受けとる)

田宮 彼の予定表です。何月何日何時何処に現われて何をするか。

光江 この〇×は。

田宮 作戦の成功と不成功の印です。そして光江さん、彼は次の行動予定として、貴女たちを地下鉄工事現場から救出する作戦を立てていたので。彼の意志をついで、僕がニセハリマオになりました。

光江 へえ！ でも、わりかし格好よかつたわよ。

田宮 そ、そうかなあ。

光江 でも、おけがなさつたでしょ。

田宮 ええ、なさつちやつた。光江さん、ハリマオと僕は同郷でね。僕の町では、葬儀の行列を夜たてるんです。

燭台の列が出来、それが進み始める。

田宮 ごらんなさいハリマオの葬列が行く。

先頭に紅屋とミンプクがいる。

田宮 ハリマオは死んだ！ 僕が殺した。たかがマリアひとつ治療できなかった。ハッハッハッ（泣きながら）ハリマオがハハハハ……マリアで死んだ。

光江 田宮先生！

田宮の声が苦しいうめき声に変わる。全てのローソクの火は消える。

やがて裸電球が点ると、忘我した田宮が机を前に立っている。桂がいる。

今のは田宮の見た幻らしい。

桂 先生、先生。田宮先生。

田宮 ハッ。ああ、何だ君か。どうしたんだ。

桂 電灯もつけずにどうなさったんですか。

田宮 停電じゃなかったのか。

桂 いいえ。

田宮 いや何、ちょっと考えごとをしていたんだ。例の地下道から救出してきた光江さんの具合はどうだ。

桂 はい、もう元気に看護人として仕事に従事しておられます。それより田宮先生、顔色が良くありませんが。

田宮 そんなことはないさ。

桂 あの神竜とやらに撃たれた傷は大丈夫ですか。

田宮 大丈夫だよ。ツバつけといたから。

桂 先生はこれからもハリマオに化けるつもりなんですよ。

田宮 ハリマオになるのはあん時が最初で最後。あれは光江さんを助ける為だ。

桂 でも、私、ゲリラやってみたいわあ。金星の嵐なんて格好よくって。

と、遠くで銃撃の音がする。

田宮 夜戦だな。柱君、一応オペの準備はしておこう。

桂 はい。

二人出て行ったアトに光江が入って来る。机のひき出しを開けて、ハリマオの遺品を見つしまう。

光江 これは……まさか、あの田宮先生が。ハリマオ。

あの紅屋が顔を出す。白衣を着ている。

紅屋 お今晚は。

光江 紅屋さん。(あててひき出しを閉じる)

紅屋 ちよいと休憩です。光江さんもですかあ。

光江 え、ええ。

紅屋 また夜戦だ。サーチライトがナイフのように夜空に斬りつけている。まるで火山の溶岩が飛び散るみたいに野原は火の海だ。バカだねえ、命をソマツにしちゃつてさ。

光江 御用はナアーニ。

紅屋 あ、今度は無事お帰りになりまして、まことにおめでとうございます。どうです、敵の男に抱かれやしませんでしたか。へっへっへ。

光江 御用は何なの、七ツの戦線に支店を構える薬品問屋のダンナが、社交辞令で私に会いに来るわけないでしょ。

紅屋 そりやもう、商いにですよ。決まってまさね。ね、光江さん。サラマンダの熱い種子が手に入ったんですけどね。

光江 ! サラマンダの。……

紅屋 そうです。ウンディーヌの水柱とともにその高名を二分するサラマンダ。火の戦線の綿畑が占領軍に焼かれてからはもう絶対に手に入らないだろうとされてます。が、しかし、火の戦線の地下綿花園では今なお極秘のうちにサラマンダの熱い種子は作られているんですよ。

光江 今日、持ってらっしゃるの。

紅屋 ええ。しかし。これは別の女に頼まれた品物なんです。あなたが帰ってみえると聞いて、ちよいとあなたのお耳にもと思って。

光江 私以外にも中毒の人間がいるのね。誰？

紅屋 それはチョツと言えません。ところで現物は二本きりしかありません。手に入らなかったということで、一本ずつ買って頂けるんなら、お分けしても、

光江 分かった。買います。頂戴いくら。

紅屋 五円。

光江 今度届けてもらった時に払うわ。

紅屋 それじゃあ、とりあえずはい、一本。

紅屋、タンポンを差し出す。それをひったくる光江。

紅屋 入れた瞬間まるで炎が全身を突きぬいた感じだそうですよ。溶けるような熱い一夜をどうぞ。では。

紅屋、去る。入れ替りに田宮入って来る。

田宮 おんや光江さん。仕事なんかして大丈夫なんですか。

光江 ええ、もうスツカリ。

田宮 今出て行ったのは薬品業者の紅屋ですよ。

光江 ええ。

田宮 あの男、あまり評判良くないんすよ。

光江 へえ。

田宮 武器で儲けずに薬で儲けてる。しかもよくない薬も流しているらしい。マリアの特効薬でも大分儲けているらしい。でも、何故なんだろう。マリアのこうまで蔓延しているのは。

光江 流行の時なんですよ。

田宮 ええ、そりゃね。戦争があるとマリアってのは流行るんですよ。

光江 あら、どうして。

田宮 光江さん、貴女も看護婦なら知っているでしょ。梅毒のマリア療法のことを。

光江 ええ、毒をもって毒を制す。マリアの病原体がスピロヘータを食べちゃうんですよ。

田宮 戦いに女、兵士にインバイ。やっぱり戦争が原因だな。戦争は嫌だ。まるで梅毒におかされた肉の国家にマリア病原体の血のような解放軍が闘いを挑んでみたいだ。

光江 ねえ、嘆きのドクター、一つ聞いてもいいかしら。

田宮 はい、何でしょう。

光江 ハリマオが死んだってのはウワサよね。

田宮 光江さん、失礼します。僕はその件に答えられない。

光江 待ってちょうだい、もしかして田宮先生。

田宮 ちがう、ちがうんだ光江さん。

光江 じゃあ、これは何、(と、机の中からターバンにサングラスを出す)この虫が喰ったアトのあるターバン、それに遠近両用のサングラス、私は覚えてるわ。これはハリマオの。

田宮 光江さん。今、この病院ではハリマオごっこが流行してるんです。

光江 いいえウソだわ、それは。見てちょうだいこのサングラスのここんとこ、これは私が噛んだアトよ。田宮先生、ハリマオは私か悦びのあまりにサングラス噛んでも私をシカらなかつたの。私。十九の春でした。

田宮 とてもロマンチックな話ですね。

光江 ええ。あれから五年、私は看護婦になった。田宮先生……。

田宮 光江さん、それはハリマオの遺品です。そして、ハリマオの死は軍事機密です。(去ろうとする)

光江 待って！ では私を助けてくれたハリマオは。

田宮 あれは僕です。

光江 何故？

田宮 ハリマオの死には責任がある。

と、急によろめく田宮。桂が入って来る。

桂 先生！ 急患です。オペが必要です。さっきの戦闘で……先生、どうしたんですか。

光江 田宮さん。

田宮倒れる。それをささえる光江。

田宮 オペをやらなくちゃ。もうこの野戦病院に外科医は僕しかいないもの。

桂 先生、すごい熱です。

田宮 桂くん。

桂 はい。

田宮 君ね、バファリン持って来て。

桂 はい。バファリン。(去る)

田宮 光江さん、手を貸して下さい。

光江 はい。

田宮、光江の肩で去る。

サイレンが鳴る。田宮、血だらけでメスを片手に出て来る。

田宮 オペに失敗した。あかん。(よろめいて机にすがる) ああ、私もまた、マラリアに倒れるのか……。

田宮、ハリマオのターバンとサングラスをつけてみる。さらに銃を握ると、その銃は何者かにハジキ飛ばされる。

神竜がいる。

神竜 再びお眼にかかれて光栄です。ほほほ。

田宮 君は？

神竜 ゲリラ狩り部隊の隊長、神竜です。あれ以来地下鉄工事はどこおっております。何としても労働力がある。おい。

と、片眼の親方が出る。

片眼 へい。

田宮 あ、生きてる。

神竜 我々の科学はある程度のバカは復活させることができるのだ。火を放て！
片眼 へい。おい野郎ども、火を放て。

田宮 待て。

神竜 動くな。いくら英雄といえど素手で勝目はなかるう。片眼！、労働力になり
そうな奴は男でも女でもいい、連れて行け。

火の手があがる。銃撃の音がする。悲鳴が飛びかう。ミンプクが神竜を狙っている。が逆にミンプクが誰かに腕を撃たれる。タツ婆さんの姿が現われる。

神竜 タツさんか、借りができたね。

タツ いいってことよ。

神竜 ついでに、ハリマオ殿をひつくくってくれ。

タツ あいよ。

片眼が来る。

片眼 神竜様、みんなつかまえました。今夜の作戦は成功です。

田宮 病院の襲撃は条約に反している。

神竜 その病院がゲリラの巣だったわけだ。

田宮 違う！ 俺はハリマオではない！

田宮、よろけて倒れる。

片眼 野郎！ しっかりしろ。

神竜 あっちの国民服の男も連れていけ。ほっほっほっ……

皆去ると、桂と光江が出て来る。燃え落ちる天幕の中、二人はタンポンを
うつ。

桂 光江さんあんたもなの。

光江 桂さんこそ。

桂 サラマンダの熱い種子なのよ、これ。

光江 私もそう。

うち終わると、二人してサングラスをかける。二人歌う。

♪ 黒き下着に白い肌

濡れた股間にひとさし指を
あてて入れたるタンポンの
名はサラマンダ 火の妖精
からだの中は火事のように
頭ん中は夢のように
そしてみいんなウソのように

炎の中に身をくねらせる
我名はサラマンダ 火の妖精

光江 田宮さん。

桂 田宮先生。

光江・桂 きっと助けに行きますわよ。

二人、白衣を脱ぐ。黒いシュミーズが現われる。

檻の中、虎にまたがった双樹が見える。

双樹 お祖母ちゃんは黒いシュミーズになるとプラネタリウムの星のように僕の学生帽の中へやって来ました。そうだろ、ハリマオ。

ハリマオと呼ばれた虎。吠える。

第二幕

序景 一幕の前

リュックサックを背負ってズックグツをはいたデン助が誰かを待っている。
引率の教師がキツネのお面で早く早くをする。

デン助 双樹は何処へ行ったんやろ。せっかくの遠足なのに。(ひっこむ)

双樹が檻の中の男の背に乗って現われる。

双樹 こっちもこれから遠足だい。

音楽。幕開く。

景一 幸いの夏

焼け落ちた野戦病院アト。赤いリュックサックを背負った光江と桂がいる。光江と桂は銃をみがいてケンカ仕度である。空が青い。紅屋が顔を出す。

紅屋 おいおい遠足にでも行くよな気分じゃないのかい。

桂 冗談じゃないわ。

光江 私たちは真剣なんだ。ハリマオを助けに行くんだ。

桂 サラマングゲリラ隊よ。

紅屋 チェーホフオマンタ、何言ってやんでえドッコイラコイ。ハリマオは死んでるんだぜ。

光江 いいえ、ハリマオは生きている。

紅屋 へー、そうかね。まあ、たとえ百歩譲ってそうだとして女が二人で何が出来るんだい。レスビアンでもやる気かい。

桂 バカにしないでよ。

紅屋 相手はプロですよ、え！ ゲリラ専門のプロ戦士なんだぜ。

桂 覚悟はできてるわ。

紅屋 覚悟が一億あったって、命はひとつしかないんだよ。なあ、考えなおしなさいよ。

光江 ねえ、紅屋さん、あんた昨夜の襲撃でよく助かったね。何処にかくれてたんだい。

紅屋 私じゃ忍術使いですからね。ヒュールドロンで消えられるの。

桂 あっそう。なら、今すぐ消えて頂戴。

屋 ヒュール……おっと、そういうわけにはいかないね。タンポンのお代をもらうまでは。

光江 今度会ったら払います。

紅屋 今度があればいいけれど。ああ、空はあんなに青いのに、娘よ何故死に急ぐ別に死に急いでるわけはないだろう。俺の眼から見れば遠足だ。それが証拠にその背中にしよった赤いリュックサックは何だい。

桂 仕方ないじゃない、丁度焼け残ったのがあったんだもの。

紅屋 へえー、野戦病院が焼け落ちて、残ったものが赤いリュックか。それいったいどういうダイイングメッセージなのかねえ。

光江 そういえばそうだけど、誰かがきつと子供のお土産に持って来てたのよ。

紅屋 そうすると、今頃その子供たちは遠足に行けなくてヒイヒイ泣いてるわけだ。桂 そうかもね。

紅屋 ほいでもって君たちがその子供のかわりに、この亜熱帯の荒野をヒタスラピ

ツクニツク！ めざすは敵の地下鉄工事現場。

光江（スックと立ちあがる）あの地域はもともと巨大な墓地だったのよ。『ル・ナ・センタ』幸いの夏という意味よ。それがあの地の名前だったわ。この国では夏に、年に一度の葬式があったの。だから、掘ると骨が出てくるわ。骨ばかりが出てくるわ。そんな土地を何故彼等は地下鉄の通り道に選んだのか。……幸いの夏は今、悲鳴をあげているわ。

紅屋 くわしいね。光江さん。

光江 今からは光江は止めよ。私の名は光る八月よ。

桂 私はヴィナス・ストーム。金星の嵐。

紅屋 俺なんか、三十坊主ってのどう。

光江 さあ、そろそろ行くよヴィナ。

桂 はい。

紅屋 ちよい待った。リュックサックの中に赤チンかヨードチンキは入れてかないかい。（と、取り出す）

光江 ツバをつけるわ。私のツバはヨードチンキの味がするもの。ペロペロ。

桂 私のツバはクロロホルムよ、ペッ。

紅屋 へえー。ちよいとナメてもいいかい。

光江と桂。紅屋の足下を撃つ。

紅屋 分かったよ。それじゃセンベツをあげよう。さて、取り出しましたるは奇跡のタンポン、小野小町。強姦予防に一つずつあげよう。（投げる）

二人、それをリュックに入れると出発する。

紅屋（それを見送りつつ、懐からアンパンを出して）ムシヤムシヤ。パク。パク。元気で行つといで。（さらにターバンとサングラスを出してハリマオのように身につける）もうおシマイにしようと思ってたんだ。だからせっかく身替りに死んでもらったのに。せっかく、実業に身を入れ出したのにねえ。幸いの夏か、光江さん、あんたが悪いんだよ。

天空から一本、ロープが降りてくる。そのロープを紅屋のハリマオ、キツと握る

暗転。

うす暗い地下道をハイずって進む光江と桂。

桂 ねえ、光江さん。いえ光るハゲさん。

光江 光る八月よ。

桂 ええ、光るバケツさん。

光江 なーに。

桂 ハリマオとどういう関係なの。

光江 馬に乗って走っていったわ、私の眼の前を。

桂 おいくつの時？

光江 十九よ。半玉だったわ。オクテだったからね。

桂 それで？

光江 ハリマオが最初の男だったの。

桂 どうして看護婦に？

光江 ハリマオに会えると思ってよ。

桂 ねえ、ハリマオとタンポンとどっちがいい？

光江 シッ、だまって。あっちに明りが見えるわ。出口よ。

桂 あたしはタンポンね。

光江 あたしはハリマオのほうがいいわ、タンポンも悪くないけど。

桂 私ね、時々、男がタンポンのように見えてくる時あるの。

光江 タンポン中毒の症状よ、それは。

桂 あたし、そういうタンポン男って、タンポンメンにして夜食程度に食ってやる。

光江 私たちって無気味な話をしつつ、活劇の現場に向かっているのね。もうこの辺りは幸いの夏だものね。

ムチの音がする。ピシッ。

桂 ねえ、作戦たてないで大丈夫かしら。

光江 そうねえ。じゃあこうしましょう、タマが飛んできたら、貴女、私の前にスツと出るの。

桂 それで、命中しそうになったらサツとよけるのね。

光江 あなたってワリカヒ恐しいこというのね。

桂 ワリカヒね。

光江 (たばこを出して) どう、喫っ？

桂 ええ、ありがとう。――ああ美味しい。

光江 この作戦では、こっちの身が危険になっても、正義の味方はやって来てくれない。それだけは確かよ。だって、正義の味方を救出に行くんだもんね。

桂 ねえ、そうすると私たちは、正義の味方の味方ってわけよね。

光江 そうねえ。

ムチの音がする。ピシッ。

桂 ねえ光江さん、いえ、光る八月。紅屋のくれたタンポンだけど、入れていく？
光江 強姦予防だと言ってたわね。

桂 だいたい女は捕われると、サレるでしょ。センベツとしては気がきいてる方よね。

光江 じゃあ、打っていくか。(取り出す)

桂 私はよすわ。

光江 どうして。

桂 スリルを愛する女ですもの。

光江 じゃあ、私もよすわ。

桂 光江さん。いえ光る八月さん、スリルよスリル。

光江 うん。さあいくよ、ヴィナス・ストーム。

桂 よし、光る八月。

光江 サラマンダゲリラ作戦だ。サラマンダ、サラマンダ。

桂 ナンマイダ、ナンマイダ。

光江 サラマンダ、コラナンダ。

地下鉄工事現場。神竜がブランデーなんぞを一杯やっている。その傍に下着を赤く染め、ケツを押さえながら田宮のハリマオが転っている。

神竜 気持はえかったかねハリマオ君。虎のケツはおいちいねえ。汝、虎穴に入らずんば、ズビズツバだねえ、ほほほ。犯されるのは何も女ゲリラばかりとは限らない。時には君のような肛門の処女もいるのですよ。ほほほ。あの国民服の男も今頃はおタツさんに強チンされているでしょう。しかし、一発のアトの一杯のブランデーの何と美味しいことか。一曲歌いたくなるのよ。ほ……。

とーとつに、ブランデーの歌をうたう。

♪不思議の星の不思議な日には

あたりまえの事件が起こる

下駄屋の女房が猫ふんで

風呂屋の婆さん銭かんじよ

のれんの女将が寝すごして

めし屋の娘が犯される

しかし ブランデー

ブランデーが空になる日はない
あふれ出る泉のような
命のお水 ブランデー
とってつけたような
ブランデーの歌

神竜 マラリアなら心配するな特效薬が山ほどある。

と、下半身フンドシ姿のミンプクがタツ婆さんに押されてフラフラとやって来る。

タツ 駄目だねえ、このボケナスは。

神竜 鳥肉食ってないからだろう。

タツ やっぱリカシワでないと駄目だね。でハリマオちゃんのおいどはどうだったい。新しい宇宙は覗けたかい。

神竜 ムチを三つ程使ったら気絶してしまった。これがマレーの虎と恐れられたゲリラの雄かね。ほほほ。

タツ どう仕末するかね。この二人。

神竜 他の連中と同様に工事現場にぶちこんどけばいい。そして教えてやるといい、これがハリマオだ、君たちの英雄だ。ただし、肛門は処女ではないと。ほほほほ……。

タツ 捕えた連中の中に、あんたのお気に入りのメス虎がいなかったけど。

神竜 それならもうすぐここへ来る。このケツ破れの虎を救出にやって来る。今度こそモノにしてやるぞ光江っちゃん。蛇の介の名は伊達じゃない。ペロペロ。おタツさん、こいつらをあの監看中へ閉じ込める。メスの虎が臭いを嗅ぎつけてやって来る。ほほほ、また花束がいる。ほほほ……黒いリボンの……花束が……。

タツ (二人をケリ飛ばして起こす) さあお立ち、立つんだよ。私の名はおタツだよ。関係ないけど立つんだよ。

二人立つ。

タツ 立ったら歩くんだ。立てば歩め、歩めば転べのないスズメ。さあ歩け。

田宮 ひと思いに殺せ。

タツ そうはいかない。しばらくはこの檻の中に入ってもらおう。

田宮 何だこの檻は。

タツ 工事中に掘り出したのさ。

田宮 ここは昔、墓地じゃなかったのか。

タツ そうらしいね、これは誰かが生き埋めになっていたものらしいわ。イッヒツ

ヒ。今夜はここで。眠るんだよ。イッヒッヒ。

タツ、去る。

田宮 ああ、何てことになっちまったんだ。

ミンブク あんたが悪いんだよ。あんたがハリマオなんかに化けるから。

田宮 そうだ。僕の責任だ。うっ。

ミンブク どうした。

田宮 うしろが痛い。

ミンブク さすってやろうか。

田宮 やめろ、よしてくれ。

ミンブク いいから、まかしとけ。そのかおり俺のも頼むよ。あのバ婆のおかげでピリピリしてるんだ。な、互いに痛いところをいたわりあって今夜は過ごそう。

田宮 冗談じゃない。

ミンブク 俺、本気だよ。

田宮 そうか、君はゲイか。それなら最初から神童とかいう男色ヤロウのところへ行けばよかったんだ。

ミンブク どれ、痛いところを見シテミイ。

田宮 バカ！ やめろ。僕はゲイじゃない。僕は医者だ、ゲイでなく外科医だ。自分の傷のことくらい自分で分かる。

ミンブク じゃあ、俺のを見てよ。

田宮 見たくない。

ミンブク ハリマオの親方は見てくれたぜ。

田宮 手下だったのか君は。

ミンブク 工兵隊で、モグラみたいに穴掘ってたんだ。ぬけ道作りだ。

田宮 それでゲイになったのか。トルストイみたいな奴だな。

ミンブク フロイトだろ。

田宮 そうだったか、ゴメン。

ミンブク ほんとに医者なのかあんた。

田宮 実は、モグリなんだ。

ミンブク あんたもモグラか。

田宮 いや、モグリだ。本職は俳優だ、役者をしていた。

ミンブク そういえば何処かで見えた顔だ。

田宮 医者役がはまり役だったんだ。

ミンブク 分かった『白く塗りたる巨塔』。

田宮 戦争が始まって、兵隊になるのが嫌で医者ふりして最前線まで来たんだ。ミンブク どうしてそんなことを俺に言う。

田宮 もう医者顔をしている必要がなくなった。

ミンプク で今度はハリマオになるのかい。

田宮 責任上一回なっただけだ。

ミンプク 二度めの今は。

田宮 出来心で。……それが裏目に出やがった。

ミンプク ほんとの裏目に出たみたいだな。(と、シリを見る)

田宮 よせ、見るな。俣は芸能人としては珍しくホモのゴシップはなかった男だ。

と、光江の声。

光江 田宮さん。

暗がりからサラマンダゲリラの二人現わる。

田宮 光江さん！・

光江 シイツ。助けに来ました。

桂 サラマンダゲリラなんです。

田宮 しかし、僕はハリマオでもなんでもない。

ミンプク おまけに外科医でもない只の役者。

田宮 その通りです。

光江 ええ、今のお話、うかがいました。田宮さん。でも、あなたはハリマオ。私を一度救ってくれました。

桂 田宮さん、私、昔あなたのクイズ番組見ました。

光江 ここから逃げましょう。そしてもう一度ゲリラ部隊を組織して闘いましょう。ハリマオの死に水を取ったあなたが、二代目のハリマオになればいいのです。

田宮 あの時マリアの特効薬さえあったなら。……

桂 さあ、昔のことは水に流して。早く逃げるのよ。

ミンプク 逃げるったって鑑の中だ。

桂 出てくればいいじゃない。

ミンプク 無茶言うな。

桂 どうやって入ったの。

ミンプク 鍵さえあれば……。

桂 どいてて、鍵をこわすから。

桂、銃で鍵を壊そうとする。一発め。

桂 しまった、ハズれちゃった。

光江 どいて。(鍵を撃つ)

鍵は壊れる。

桂 やった。スリル、スリル。

と、サイレンが鳴る。身構える四人。神竜たちが現われる。

神竜 お待ちしておりました光江さん。のびのびになっていたプロポーズの御返事今日頂けますかしら。このように今日の花束は黒いリボンでしばっております。いずれにせよ生きてここから出て頂くわけには参りません。ほほほ。

桂 死は覚悟の上よ。

光江 しかし神竜、お前も道連れにしてやるからね。病院から連れ出した人たちは何処へやった!?

神竜 そりやもう細胞の一つが死にきるまで工事に従事してもらっております。看護婦の諸君は私のお部屋でお医者さんごっこ。ほっほっほ。

桂 ああ、スリルだわ。

光江 濡れちゃダメよ桂さん。あなたはヴィナス・ストームでしょ。

桂 ええ、サラマンダよ、ああ、ナンマイダ。

神竜 つべこべ言わずに銃をステなさい。光江さん、早く私に愛の告白を。

光江 いいえ、愛のかわりに鉛をあげるわ。(銃をかまえる)

と、桂、銃をステる。

光江 どうした、ヴィナス!

桂 背中がスリルなのよ。

光江 え!

ミンプクがナイフを突きつけている。

田宮 きさまっ!

光江 どういうこと。

神竜 ほっほっほっ。

タツ もともとその男はこちらの人間なんだよ。ひっかかったね。

ミンプク さあ、光江さん銃をステてもらうおう。(桂の銃を田宮に向ける)それとも、

田宮の頭が消えてしまうのを見物するかい。

光江 くそオッ。

神竜 愛してるよ光江さん。極限だよ、ほっほっほ。ハトホッホ。

光江 えーん。くやしい! くやしい。くやしいよー。

桂 スリルになっちゃうのね。

光江 (銃をステる) ちくしょおお。
田宮 光江さん、すまん、僕の為に。
神竜 よし、光江殿を残して後は殺せ。
片眼 はい。(光江を引っばってくる)

田宮と桂が檻の前に立たされて、おタツとミンプクが彼等に狙いをつける。

神竜 ほっほっほ。悪徳の栄です。

光江 田宮さん！

田宮 あの世で待っている。好きでした。

桂 ああ、スリルう。

神竜 (片眼に) 殺れ。(光江を抱きよせる)

片眼 はっ。(銃を構える)

光江 神よ、初めてあなたに祈ります。もしこれが伝奇ロマンであるのなら、我らを救いたまえ、否、もとえ、私は作者に祈りましょう。ここで私たちが皆殺しに会ったなら、私は作者の鬱性心身症を呪います。いくら文章表現力がないたって、私たちを助けるくらい出来るはず。ペンを走らせ、マスを埋めよ。そこに今一人の正義の使者の現われんことを！

銃声三つ。片眼、おタツ、ミンプクと、それぞれ銃を飛ばされる。ハリマオが現われる。

紅屋のハリマオだ。ロープをつたって、降りてくる。

光江 ハリマオ！

ハリマオ 御要望にお答えしました。ハリマオです、さあ、神竜君、その女ゲリラを離れたまえ。私の腕は今見た通りだ。

神竜 まさか！

タツ ハリマオは死んだはずだ。

ミンプク 親方はマラリアで……。

ハリマオ ミンプク、裏切者。私は裏切者はゆるさない。(ミンプクを撃つ)

ミンプク (倒れる) 親方……。

田宮信じられない。ハリマオは僕の病院で……。

ハリマオ 虎は複数で放たれたのだ。私もその一人にしか過ぎない。そしてマラリアで死んだ虎は、あれは私の影武者だった男だ。さあ諸君逃げたまえ。私の最後の仕事だ。今回限りで私はハリマオをやめる。後は田宮さん、あなたにおまかせしよう。

光江たち銃をひろってぬけ道へ去る。

ハリマオ 光江さん、お達者で。(投げキッスする)

光江 ハリマオ……。 (去る)

神竜 おのれえ！ ラブシーンまでやりやがって。その余裕だ、正義の使者のそれが気に入くない。ハリマオ、一対一だ。勝負しろ！

ハリマオ まあ待て蛇ちゃん。それより取り引きだ。(と、サングラスをはずす)
タツ・片眼 あっ。

神竜 紅屋。

ハリマオ そうだ。紅屋だ。ハリマオは今限りでホントウに廃業だ。

神竜 おのりえーっ。

ハリマオ ストオップ。これが何だか分かるかい。(と、タンポンを見せる)

片眼 それは、もしかすると、

タツ わたしにはもう不要なもの。

神竜 いや、違う。あれは超小型爆弾のレギュラーサイズ。

ハリマオ いや、これは普通のタンポンだ。出しマチがったのだよ。ほれこっちだよ、これが超小型爆弾レギュラーサイズ。

神竜 いったいどんな取り引きをするんだ、えー。

紅屋 火の戦線の地下綿花園でタンポンを開発中、偶然、出来てしまったのがこの爆弾だ。私はこれを解放軍に売った。マリアの特効薬を君たちに売ったようにだ。マレーの白い牙と、私はこの爆弾を名付けた。この新兵器によって戦局は必ず逆転する。君たちは負ける。

片眼 何だって！

神竜 それで、君は僕にどうしろと言うのかね。

紅屋 ゲリラ狩りを止めてもらいたい。

神竜 バカ言え。

紅屋 さすれば、軍にとりからはからって、君の命は――

神竜 紅屋くん！ 君もバカな男だね。いったい誰が何のために地下に鉄道を走らせようとしているのか、それがよく分かってないようだね。

紅屋 ほほう。

神竜 いいかね紅屋君、戦争が我々の負けで終わることくらい、先刻充分ショーチなんだよ。

紅屋 なる程、それで。

神竜 いいかねゲリラ狩りは我輩の趣味なのら。僕ちゃんはね紅屋君、もっともつと大きなことを考えているんだよ。見たまえこの地下を、ここは骨のたまり場だ。まるで大根のように掘れば骨が出てくる。土中の骨。紅屋くん、これはいったい何だろうね。えー、紅屋くん。これは歴史だよ。歴史なんだよ。僕ちゃんはこのキツタナラシイ土中の歴史に文明を走らせるんだ。ドオーツと文明を走らせるんだよ。コッパミジンに骨を俵いて文明が走る。どうだい紅屋、お前さんが歴史の生理用品

を売ってゲリラをやってる間に僕ちゃんはおも現実的な銭もうけを考えているんだよ。

紅屋 なる程、りっぱなことだ。

神竜 ニヤロメ、せせら笑ってるだろテメエ。その不敵さがゆるせない。おい、紅屋一対一で勝負しろい。

紅屋 よし、分かった。お望みとあらばそうしよう。さあ、ぬきたまえ。

神竜 銃をかせ。

片眼 へい。

神竜 三つ数えろ。

片眼 へい。ひとつ。ふたつ。みっつ。

銃声。

神竜 バカな。僕ちゃんのほうが早かったのに何故キサマ死なんのだ。

紅屋 確かにそのとおりだ。おまえの方が早かった。だからこそ、おまえの撃ったタマを私は打ち落とせた。

神竜 なぬ。(と、もう一度撃つ)

紅屋 (打ち落とす) 何度やっても同じだ。ではさらば。取り引きは不成立だ。

爆弾を投げる。皆伏せる。紅屋は消える。爆発しない。

片眼 ……不発だ。……

神竜 ううーん、ううんううん。(ただをこねるようにして片眼をなぐりつける)

暗転。

しばらくして爆発する。

片眼 (声だけ) 爆発した。……

神竜 (声だけ) アホッアホッアホッ!

景二 火の妖精たち

新しく組織されたサラマンダゲリラ隊が歌う。

♪黒き下着に白い肌

濡れた股間にひとさし指を

あてて入れるタンポンの
名はサラマンダ 火の妖精
からだの中は火事のように
頭ん中は夢のように
まるで世界がウソのように

炎の中に身をくねらせる
我名はサラマンダ火の妖精

黒い下着に赤いリュックサックの六人の乙女たちがタンポンを打つ。田宮のハリマオがオモチャの馬に乗って登場する。ヒヒーンと自分でいなないてみる。

田宮 ハリマオーツ。ハリマオーツ。マライのハリマオ……。

拍手。

田宮 秘書君、今日の予定は。

桂 朝の訓辞の後、昼は畑で大根作り、夜は敵のBブロック沿線鉄道の爆破、深夜は解放放送のいいデスクジョッキーです。

田宮 実に調和のとれたスケジュールだ。しかし、昼の畑の大根作りはチョイト気になる。

桂 あら、それは何故。

田宮 いや、深く追求しなくともよろしい。健康的でよろしいよろしい。ところで光江さん。

光江 光る八月です。

田宮 戦争はいつ終わるんだらう。

光江 人類史の終わる頃には。

田宮 だらうな。

桂 隊長、朝の訓辞を。

田宮 よし、諸君。サラマンダゲリラの諸君チチンパイパイ。以上、今朝はこれだけ。

皆、拍手する。

田宮 解散、大根畑でまた会おう。

皆帰っていく。田宮はそれを見届けてからタンポンを一ヶ取り出し、己の

尻に入れんと試る。

光江 (ソツと現われて) ハリマオ。

田宮 (とりつくろって) あっ、光江さん。……見、見てたの？

光江 ええ。

田宮 それで感想は？

光江 大きな河に漂う舟が見えます。

田宮 そ、そうか。

光江 では、大根畑で。

田宮 あ、ちよい待ち。

光江 何でしょう。

田宮 大きな河に漂う舟って、どういう意味の暗号でしたっけ。

光江 大きな河というのは歴史のこと、舟は私たちのことですよ。

田宮 あっそうか。で、舟はどうなんの。

光江 沈むみたいね。あなたのお尻ん中へ。

田宮 ハハハ……(悲しそうに) 笑って下さい光江さん。あの蛇野郎にカマられて以来まるで僕の尻は地下鉄工事の現場のようにポツカリと空洞が開いたみたいである日あまりのポツカリとした空しさに、君たちの使っているタンポンを失敬しておさめてみたところ、まるで電車が走るようにスイスイと。それからもう病みつきです。しかし、光江さんこれは舟ではありません。言うなればこれは一本の骨です。「忘れられた骨」とでも申しませうか。確かに持主がいるのにかかわらず、外にありて只、埋められる時を待つ「忘れられた骨」。さすれば、我お尻の穴は墓の穴。まるで幸いの夏のようにそびえる丘。こう考えると、我々のポン中、タンポン中毒は何やら我々の闘いを暗示してはいますまいか。

光江 さすがに役者だったことだけはあるわね、田宮さん。ステキな長台詞だったわ。

田宮 モノローグの田宮と言われておりました。

光江 では大根畑へ。

田宮 光江さん、やっぱり僕にはハリマオは無理なんじゃないだろうか。

光江 バカ。今さら何を言うの。田宮さん、これは演劇じゃなくて戦争なのよ。役どころがマチがつていようがなかるうが、始めてしまったものは仕方ないのよ。では大根畑へ。

田宮 それだ、その大根畑という言葉が僕には皮肉にしか聞こえないんです。光江さん、僕はミスキャストです。外科医をやっていた時までが僕で、この英雄はやはり僕じゃない。ハリマオはミスキャストです。

光江 あなたは男だからミスということはないんじゃないかしら。

田宮 なる程、それもそうだ。

光江 ミスターよ。やっぱし。

田宮 ミスター。まがりなりにもスターですね。

光江 ええ、ミスターキャスト。

田宮 ミスターキャストのハリマオ。おお、これなら大根畑も平気だぞ。

光江 その素朴さは愛されるわ。

と、ええーいという気合いとともに女ゲリラ1が田宮に大根で斬りかかる。

田宮 オリヤツ。(大根をたたき落とす) 踏みこみが甘い。

続いて、2、3、4と大根を構えて出て来る。

田宮 おお美しい乙女たちよ。君たちには大根が良く似合う。

2が斬りつける。

田宮 それでは人は斬れぬ。僕はミスターキャストのハリマオだ。

3が突く。

田宮 腰がのびてる。もっと脇をメて。

4がはらう。田宮ひらり。

田宮 もっとよく見るんだ。

1、2、3、4、同時に斬りかかる。それを拳銃でもって撃ちおとす。

1・2・3・4 うわア、ずるーい。

田宮 だまれ大根娘ども。一対四の争いに必ず勝つを兵法という。

桂 えい。(と不意打ち)

田宮 (それを脇で取る) おっと不意打ちゲリラの兵法。

光江 (斬りつける) エイツ。

田宮、それをグイツとつかみ、ガリツとかじる。

田宮 かじりつきの名演技だぞ。

光江 いいわあ、そのファイト。

田宮 見せたかったな僕の時代劇。

光江 でも、あなたは今、ハリマオよ。
田宮 そうだ。僕はミスターキャストのハリマオだ。貧しき者に味方する正義の虎だ。

また、馬に飛び乗る。

田宮 いくぞ、火の妖精の少女軍、風雲のパゴダより絶海の戦場へ、つまづいても大根でも行くぞ。(走り去る)

サラマンダゲリラ隊、歌う。

♪黒き下着に白い肌

濡れた股間にひとさし指を

あてて入れたるタンポンの

名はサラマンダ 火の妖精

からだの中は火事のように

頭ん中は夢のように

まるで世界がウソのように

炎の中に身をくねらせる

我名はサラマンダ火の妖精

光江だけ残して去る。

光江 まるで遠足ね。

「そう、まるで遠足だ」という声。紅屋。

光江 誰だ！(銃をかまえる)

紅屋 あっしでやんす。

光江 あ。

紅屋 ヴェニススの商人。あるいは転んでもただでは起きない近江の豪商。ぶっそうなものは片付けて下さいまし。私は人殺しを商ってるわけじゃありません。傷ついた兵士をいやすお薬の方を売ってる紅屋さんです。

光江 まだ生きてたの、あんた。

紅屋 銭を持つてる人間は簡単には死なんのです。

光江 今日は何の用なの。

紅屋 光江さん、戦争はもうすぐ終わるよ。

光江 え！

紅屋 解放勢力の勝利でこの戦いは終結する。

光江 ほんとにかい。

紅屋 そうだ。

光江 あんたワザワザこんな所へそんなことを言いに来たの？

紅屋 そう。だから光江さん、故郷へ帰ろう。

光江 バカ言っちゃいけないよ。せっかくゲリラを組織したのに。

紅屋 大がかりなゲリラ狩りがある。一個師団あげての虎狩りだ。皆死ぬぜ。

光江 それはいつ。

紅屋 今夜、Bブロックから始まる。

光江 え、そりや大変。

紅屋 だから、もうゲリラごっこはやめて一緒に故郷に帰ろう。

光江 そんなことできないわ。ミスキャストのハリマオに自信つけさせて、今送り出したところなのに。

紅屋 だろうね。では仕方がない。(と、光江を撃つ)

光江 ウェッ。何を。(発砲して倒れる)

紅屋 マスイ弾でガス。大人しくしてネ、メス虎ちゃん。

光江を担ごうとする。銃声。虎にまたがった双樹！ 光江の銃をとって構える。

紅屋 誰だ。国軍か、解放軍か。

双樹 その黒いシュミーズの女性は僕のお祖母ちゃんである。

紅屋 子供？ 誰だい君は。

双樹 原双樹。

紅屋 平家物語みたいな奴だな。その変なのは。

双樹 ハリマオだ。貸本屋のウラの穴を掘ってたら檻に入って出てきたんだ。

紅屋 坊やとはどこかで会ったね。

双樹 かもね。

紅屋 で、何の用かね。

双樹 時間を超えて遠足に来たんだ。お祖母ちゃんを置いてさっさと消えろ。

紅屋 そういうわけにはいかない。今彼女を連れていかないと、他のゲリラの連中とともに犬死する。

双樹 敵前逃亡はヒキヨーである。

紅屋 戦いは一両日で終わる。国軍は最後のアガキでゲリラ狩りを……。いや、お前みたいなお子供に言ってもわからんだろう。

双樹 ハリマオ！

虎が紅屋に飛びかかる。紅屋、それを撃つ。
別のところから銃撃がある。

紅屋 よし、坊や、今日のところは引きあげる。しかし、彼女はいずれ頂いていく。もし、お前が彼女の何かであるのなら彼女を守れ。彼女を「たかが骨」にスルナ。

紅屋去る。

双樹 ハリマオ！ お祖母ちゃんを背に乗っける。今から地下鉄の穴を通って貸本屋にもどる。

幸いの夏の地下道が現われる。檻が見える。ハリマオと呼ばれた虎、その檻に帰っていく。

双樹 ハリマオ！ お祖母ちゃんを乗っけるんだってば。ハリマオ……あつ血が……そうか、あの男に撃たれたんだね。ハリマオ……。

ハリマオという名の虎、檻の中に消える。銃声が五つしてそれは時計が五時を打つのに聞こえる。

双樹 五時だ、お風呂を沸かさなくっちゃ。近所の子供たちが黄昏の中を走り回って戦争ごっこをしている。買ってもらったばかりのズック靴をクツクツ鳴らして路地から露地へ国境を越えていく。僕はマキを割る。へエイ へエイ ホ へエイ へエイ ホー、一本割ることにまだ見たこともない世界が裂けた割木の中で息を吹く。へエイ へエイ ホ へエイ へエイ ホー、火に投げる。物心つかないうちに火葬にされた赤子のように炎が叫ぶ。そうやって沸かしたお風呂に入るのは父と母だ。お祖母ちゃんは入らない。それがどんな意味を持っていたのか、僕はまだ気がつかない。五時だ。風呂を沸かさなくっちゃ。僕の虎は傷ついてしまった。傷ついた虎は僕のお風呂に入るかしらん。(去る)

田宮たちサラマンダゲリラが後退して来る。

田宮 ああ、ここは幸いの夏の地下鉄現場、これも運命か。ちくしょう、今夜の敵は何て多いんだ。

桂 みんな、退却！ 退却よ。

傷ついた女ゲリラが逃げて来る。

田宮 あ、光江さん、光江さんが死んでる。先に死んでる。

桂 まだ息があるわ。

田宮 じゃあ寝ているのか。何て勇気のある人だろう。退却の最中に眠れるなんて光江さん、僕、負けてしまった。くそ、やっぱりミスキャストでした。オカマほられたハリマオでは少年ファンができてくれません。光江さん、眠っているのなら、夢の中でヘッドホンつけて聞いて下さい。作戦は失敗でした。歴史の空洞にタンポンを埋めこむような僕たちのフィクションは失敗しました。それもこれも僕の役不足が原因です。残念です光江さん。野戦病院からの御一緒で、いよいよ共にまた闘えるこの日に、ああ幸いの夏が来てしまった。愛しておりました光江さん。あなたの愛したハリマオをベッドで死なせ、そしてあなたの愛のかたがわりのフィクションのハリマオにミスキャストだった田宮はしかし、あなたを愛しております。何て間のぬけた愛の告白でしょう。あんた眠っているんだもの。

桂 ハリマオ、追手が来ました。

田宮 最後の一発まで撃ちまくれ！ いや、まて諸君、その前にこの世のなごりだ。タンポンを打とう。

皆してタンポンを打つ。

田宮 諸君これこそ歴史の空洞を埋める忘れられた骨だ。けして、地下鉄の電車じやなあい。

「やーい、オカマのハリマオやーい」という声。追手の神童やおタツたちである。

田宮 違う！ 僕はオカマじゃない！

神童 私だよハリマオ君、君に地下鉄を掘ってあげた蛇の介だ。

田宮 おのれスキャンダル。(撃つ)

銃撃戦！ 桂が倒れる、女ゲリラたちがかけよる。

1・2・3・4 ! 金星の嵐！ 《ヴィナス・ストーム》

田宮 桂君！

1・2・3・4 早よ死んじまえ。

田宮 何を言うんだお前たち。

光江が眼を覚ます。

1・2・3・4 私たちも、もっと目立ちたい。

田宮 こんな時に自己顕示欲に目覚めやがってこの大根少女めが。

1 こういう具合に格好よく死にたい。

桂 わあ……血が出るスリルだわあ。……濡れていくう……ガクリ。

2 次、私撃たれます。撃ってちょうだい。

田宮 バカ！

光江 桂さん！ しっかりして。

田宮 光江さん、目が覚めましたか。

光江 はい。

3 次撃って、私撃ってえ。ああんもう、オシッコ出ちやうう。

4・1 私、撃ってえ！

光江 どうしたのあんた達。

田宮 光江さん、作戦は失敗したんだ。

光江 そうだ、思い出した。紅屋が言ってたんだ。

田宮 紅屋が何を言ってたんです。

光江 戦争が終わるんだ。逃げよう田宮さん、ここにいると犬死にするよ。ゲリラ狩りなんだ。ここで死んだら、「たかが骨」になっちまうんだよ。

田宮 何処へ逃げるんです光江さん。

光江 奥へ走ろう。

田宮 この穴を奥へ行くんですか。

光江 眠っている間に夢を見たよ。孫が虎に乗って現われたの。この地下鉄がどこかにつながってるって言ったの。

田宮 孫？ 光江さんに何で孫がいるんです。

光江 マゴマゴしないで早く逃げよう。

田宮 あ、光江さんが駄ジャレを言った。

光江 桂さん、金星の嵐。安らかに眠れ、チチンパイパイ。

サラマングゲリラの少女たち、何度も何度も格好よく死んでいく。桂までが起きあかって、それに参加する。光江と田宮は逃げていく。穴の奥へ、穴の奥へ。

田宮 ねえ光江さん、その年齢で何故孫がいるんです。

光江 夢よ、夢の話よ。

田宮 めずらしいなそれは。先祖の夢ってのは見る事が出来るけれど、子孫の夢ってのは普通見ないハズなんだがなあ。

光江 ねえ田宮さん、見てこれ。

田宮 ギョッ。骨だ。人骨だ。

光江 進んでいく途中、もう何本も見つけたんだけど、それが段々新しくなっているの。

田宮 へえ！

光江 ここ見て、ホラ。ここに新年号と書いてあるでしょ。これはズッと向こうでひろったの。今ひろった骨はホラッ。

田宮 二月特大号。

光江 ネット。

田宮 あ、あそこにも一本。――

三月号別冊付録！ そう書いてある。

光江 どうなってんだろ。

田宮 さあ、まるで、骨が呼んでいるようだ。

光江 ねえ田宮さん。血のつながりって言うわよね。

田宮 ええ。

光江 あれはひよっとすると、まるで出鱈目のウソッパチじゃないかしら。

田宮 え？

光江 血族という考え方が何故人類の幻想を支配しているのかは知らないけれど、私は今、血族という考えに対して骨族を、つまり骨のつながりという新しい考え方に眼覚めたの。

田宮 どうして突然。

光江 女には突然こそ必然なのよ。

田宮 なる程、それで骨が繋がっていくのですか。

光江 ええ、歴史は血の中にはないのよ。骨の中にあるのよ。何故神竜たちが地下鉄工事をやらせていたか分かったわ。骨は血よりも強いからよ。ああ、人類は血のつながりでつながってるんじゃないんだ。田宮さん、私たちは今、骨の歴史を歩いているのね。

田宮 僕は依然として疑問符の歴史を歩いていますよ。いったい骨と骨とをつないでいるものってのは何なんです。ニカワですか。

光江 出口だ。

二人、そちらの方に走るが引つかえず。

光江 どうしたの。

田宮 火事なんです。入口近くが燃えおちているんです。

光江 え。

と、サイレンの音。

田宮 あのサイレンは。

光江 ひよっとすると。

そのひよっとするとが現われる。

神竜 そうです光江さん、そのひよっとするとでナ。

光江 執念深いヤツめ。

神竜 ええ、私はひよっとこです。いえ、蛇の介です。光江さん、戦争は終わりました。従って私はもう誰を傷つけたくもありません。光江さん今までの無礼はおわびしましょう。私、生まれ変わったつもりで貴女に愛を、愛をありがとう。さあ、プロポーズの答を今こそ今こそよろしくお願いします。悪文にて失礼。

光江 おたより確かに頂きました。あなたさまもあいかわらずお元気そうで安心いたしました。後略。草々。

神竜 ねえ光江さん、プロポーズの御返事はプロポーズの。

光江 冗談じゃないよ。私や仲間の命を何度も狙っとして、恋もヘタツクレもあるもんか。

神竜 せめて、ヘタツクレくらいはあってもいいじゃないか。(泣く)

田宮 何故なんだ。ついさっきまでのニヒリストが何故こうなる。

光江 戦争が終わったからよきっと。

神竜 ミッチェイヤン。

田宮 光江さん、こんなの相手にしてないで別の出口を捜しましょう。

神竜 光江さん、僕、商いを始めることにしたんです。ほっほっほ。いかがですかこの転身の早さ、ゲリラを追いかけている間はゲリラ狩りの隊長であったのに、ゲリラの親玉と出会った今はもう商いはききなふ商人。さあ、もう武器はステました。武器よさらば、さらば与えられん。トントン。

田宮 ふざけんな。

神竜 くねくね。

田宮 よせ。

神竜 まんざら知らない仲でなし。あなたの地下鉄に僕の電車がほっほっほ。

田宮 知らん。

光江 いずれにせよ神竜さん。あなたと私たちはもう関係ないわ。

神竜 そうはいかない。何故なら光江さん、あなたには人民裁判が待っている。

田宮 何だって。

神竜 敵前逃亡。ちがいますか。

光江 あれは退却よ。

神竜 でも、私がひとこと軍に声をかければ君たちは人民裁判にかけられる。さあどうだ光江、俺の尻かシバリ首か。(とムチを出す)

田宮 無茶苦茶なヤツだなあお前は。

光江 武器よさらばと今言ったバカリじゃない。(とムチを指さす)

神竜 コロッコロの大変身、この早い身の振りようがなければ何で簡単に商人になどなれるもんか。これからはアメとムチで生きるのだ。

田宮 光江さん、ここは僕にまかせて、さあ逃げてくれ。

神竜 どけ三文役者。

田宮 いや、どかぬ。(と、神竜のすてたライフルをひろう)

神竜 フッフ。お前なんぞに俺が撃てるか。

田宮 光江さん早く別の出口を。

と、雨のような音。

光江 田宮さん、水よ。水が降ってきた。

田宮 地下道の雨ですか。

光江 分からないわ。でも傘をさしておさまるフンイキでもないわ。

田宮 上は大水、出口は大火事。まるでナゾナゾだ。

神竜 光江さん、これが最後通告です。私のプロポーズにさあお答を。

光江 あんたキライ。ツーン。

神竜 そうか、なら仕方がない。このムチで調教してやろう。ピシー。

田宮 お前のほうこそ観念しろ。

神竜 観念、あけましておめこ。

田宮 死ね神竜！

田宮の銃は暴発する。

田宮 ギャッー

光江 田宮さんっ。

神竜 だからお前は三文大根なのだ。私がそう簡単に武器をすてると思うのか。銃身に赤土がつめてあったのだ。ほっほっほ。

光江 田宮さん。しっかりして。

田宮 眼が、眼が、焼けるように熱い！

光江 田宮さん！

神竜 さあ光江さん、地下鉄のところまでもどって頂こう。

田宮 眼が。眼が。……

神竜 ほっほっほっ。そうやって、この土の中でモグラになってしまいがいいわ。

田宮 眼が燃える、眼が燃える。(去る)

光江 田宮さん。

神竜 さあ！ 歩け光江！ 幸いの夏へ。

光江 おのれ。(と、飛びかかる)

神竜 (その腕をひねって) うんうん。ナアーニ。さあ、いこうね。ほっほっほ。

幸いの夏の地下鉄工事現場が現われる。おタツ婆さんがフラフラ出てくる。

神竜 おタツさんどうした。ほらメス虎を捕えてきたよ。

おタツ、倒れる。

神竜 どうした！

紅屋が現われる。

紅屋 待ってたよ神竜さん。

神竜 紅屋、またしても、キサマー

紅屋 光江さん、故郷へ帰ろう。

光江 紅屋さん。

神竜 ええい、そんなことはゆるさナイ。

紅屋 (銃を向ける) 光江さんを渡してもらおう。

神竜 ムッほっほっほ！ 紅屋、神竜の本当の恐しさを知らんらしいな。チチンプイプイチンカラリ。アンガーラガンダーラ。地の悪霊よ、空気の妖精よ、大悪魔の名において、死より死者を解き放て！

と、暗雲に雷がとどろき、サラマンダゲリラやミンプク、おタツに片眼が復活する。

光江 サラマンダ。

紅屋 これは、どういうことだ。

神竜 ほっほっほ。さあ、ヨミの国より来たりし者よ。紅屋を殺せ！ 死の名に
おいてこやつを撃て。

紅屋 奇っ怪な。(撃つ)

死者たち、イヒヒと笑って銃を紅屋に向ける。

光江 (神竜をすりぬけて) 紅屋さん。(サラマンダゲリラに) お前たち、何を寝ぼけてんだ。いったい誰を撃とうとしているんだ。神竜！ 覚悟。(骨を手に突きかか
かる)

神竜、身をかわす。

神竜 ええいこの往生ぎわの悪い女め。いつの間にそんな骨を。

光江 骨、ハッハッハ。これは牙だ。虎のキバだ。紅屋さん、あなたがくれた炎のタンポン、サラマンダの種子が私の肉体《からだ》の中でいつのまにか虎のキバになっちまったよ。ミスキャストのハリマオはモグラになってしまった。そして、ハリマオをやめた紅屋さん、あんたは今また私を救ってくれようとして逆に絶体絶命の身になっている。私は何度も何度も助けてもらったけれども一度も誰をも救うことができなかった。しかし、今度こそは正義の味方は現われまい。だから紅屋さん、昔のハリマオ。ひよっとすると私を抱いたかも知れない、マレーの虎。今度は私があなたを救いましょう。これは遠足じゃないのよ紅屋さん。だって見てごらん、あのタンポンはここにこうして骨となり、そして牙となって私の手に握られているんだもの。これだ。これだよ。これが歴史なんだ。あんたが売ったもの、そして私か買ったもの。時の空洞を埋め、今、牙となって私に掘られているこの骨。これが私が私たちの歴史そのものなんだ。

これはきつと私の子供のそのまた子供にまでつながっていくだろう。骨をひろってくれるものが必ずいるんだ。いんや、ひろうだけでなく、この骨の歴史を逆にこちらに向かっただどってくるそんな子孫だっているかも知れない。

神竜 何をほざいているのかこのメスは。牙でも骨でも同じようなものだ。うーん、可愛さあまってニンニクモリモリ。光江さん、残念だけど死んでもらう。神竜蛇の介、最後のゲリラ狩りだ。

光江 来い蛇の介。こんどは私がハリマオだ。

神竜 かまわん、撃て！

紅屋を撃つ。紅屋、飛ぶ。光江、神竜に飛びかかる。光江、ゲリラに逆につかまる。神竜、ライフルで光江を狙う。

神竜 さらば光江さん。

紅屋 光江！（とびこむ）

光江のかわりに紅屋が撃たれる。

光江 紅屋さん！

神竜 バカめ。（と、光江を撃つ）

全く命中しない。

神竜 バカな。あたっているはずなのに。

と、高らかに笑う少年の声。

光江 誰っ！ あの声は。
神竜 誰だ！ 出て来い！

「僕だよ」とその声は言う。

神竜 何者だ、名をなれ！

双樹、さっそうと虎のハリマオにまたがって出る。

双樹 神州幻童士！

神竜 何？

双樹 神竜君、君の撃ったタマはここにある。（手を開けると、鉛のタマが落ちる）
ハリマオ！

と、例の虎吼える。

紅屋 双樹。

光江 紅屋さん。大丈夫？

神竜 何だこの小僧は。

双樹 お祖母ちゃん、骨族です。あなたの骨族です。

神竜 ええい、コツゾクだろうがケツゾクだろうが、この際ひとまとめにしてイテマエ！

双樹 吹けよ嵐！ 世にあだなす悪人どもを、正義の力で吹きとばせ。

嵐起こる。神竜と双樹、忍術使いのように身がまえる。まるで忍術の合戦だ。

虎のハリマオ 双樹、双樹、物語はこれからだ。この物語は続くのだ。ガルウーッ。
虎か、地下鉄か、双樹、これがお前の遠足だ！ ガルウーッ。

と、宙空に「次号特大号につづく」の文字現われて、
暗転。

終景 そりやおかしいね

パチパチと木の燃える音がする。双樹が本を読みながら風呂を焚いている

のだ。風呂にキツネのお面をつけた両親が入っている。出口だ！ という
光江の声が双樹にだけ聞こえる。

双樹 え？………お父さま、何かおっしゃいましたか。

父 (首を横にふる)

双樹 そうですか。すると、マキがはげたのかな。

父 そりやおかしいね。

双樹 湯かげんはどうでしょう。

父 うん。

父母の顔、湯ぶねに消える。デン助がやって来る。

デン助 双ちゃん、ただいま。どうしたんや遠足に来なくて。お土産買って来て
やったで。

双樹 ありがとう。

デン助 お祖母さんが死んだから、来なかったんか。葬式やったんか。

双樹 いんや。

デン助 靴が買ってもらえんかったんか。

双樹 いんや。

デン助 ほな、何でや。

双樹 遠足には行って来た。

デン助 ええ？

双樹 今さつき帰って来た。

デン助 ええ？ 何処へえ。

双樹 虎に乗って昔々。

デン助 双ちゃん、お土産、ここへおいとく。双ちゃんは時々作り話するからな。

さあ、家帰ろつと。

双樹 そりやおかしいね。

デン助 さいならあ。(と去る)

双樹 (再び読書を始めるが、下駄をぬぐと……) また出鱈目に踊ってみよう。神州
幻童士は双手を天に差しのべて、熱い風を呼んだ。吹け吹け正義の嵐！ 大悪魔ネ
ト王の魔人城を粉微塵にするのだ。

「双樹」という声がする。見ると祖母の光江が風呂に入っている。

光江 双樹。

双樹 お祖母ちゃん。……

光江 お前もお入り。

双樹 一緒に入ってもいいんか。
光江 いいともさ。

双樹、学生服を脱いでランニングシャツ一枚になる。

光江 いい湯だね。お前が焚いてくれたんだね。

双樹 うん。

光江 お前、大きくなったら何になるの。

双樹 うーん。分かん。

光江 何か買うてやろうか。何がいい。

双樹 (泣く) ……

光江 どうしたのや。

双樹 ……(泣きつつ) ……。ズックや……ほんまはズック靴が欲しかったん……僕。
ズックが……そいで遠足に行きたかってん……。

光江 ようし。買うてやるよ。

と、地中から虎の叫び吼ゆる声がする。

光江 あ……ハリマオツ。

双樹 お祖母ちゃん。あれは地下鉄の通る音や。(うれしそうに笑う)

確かに地下鉄の音らしい。ゴオーツと、音が走っていく。

光江 そうかい。あれは地下鉄の音かい。

そう言っって光江はズック靴を出す。

光江 双樹、ほら。

双樹 あ、ズック靴や、ズック靴や。(それを手にする)

光江うなづいて、静かに湯舟の中に消える。ズック靴を持った両手を高く差しあげて、双樹は空を見ている。

ひとひらの桜の花弁が双樹の白いシャツに舞い……。

双樹 夏が来たらこのズック靴はいて、五時が過ぎても遊ぶんや。「つづき」をやるんや。あの遠足の「つづき」を、「つづき」をやるんや！

双樹はうれしそうに白い歯を見せて微笑う。

空が青く四角い。

幕